

研究主題「言語感覚を育て、表現する喜びを味わわせる指導の工夫

—詩の創作を中心として—

東京都教職員研修センター 企画部企画課

墨田区立押上小学校 教諭 時田隆

I 研究のねらい

「東京都教育ビジョン」（平成16年4月）では確かな学力を育成し、一人一人の個性を伸ばすための提言として、言葉によるコミュニケーション能力の育成を掲げている。

互いの思いや考えを正しく伝え合うためには、言葉の使い方は正しいか、相手や場に応じた言葉遣いであるか等、正誤・適否を判断する言語感覚を養うことが大切である。また、美醜を感じ取る言語感覚を養うことは、一人一人の言語生活を充実させることや、言葉で表現したりコミュニケーションしたりすることの楽しさや喜びを味わわせることにつながるものである。

本研究では、言語感覚を育てるために詩の指導を取り上げる。詩の鑑賞や創作の学習は、言葉のよさを味わったり、自分の思いを言葉で表現したりするのにふさわしいと考えた。そこで、言葉等の表現について適否を理解・判断したり美醜を感じ取ったりしながら詩を創作する学習を中心として、児童の言語感覚を育て、自分の思いを表現することの喜びを味わわせることをねらいとした。

「言語感覚」 言葉の使い方の、正誤・適否・美醜などについての鋭い感覚のことで、語感というよりも広い意味を持ち、むしろ言語に対する感性という方が適当である。（「小学校学習指導要領解説 国語編」より）
※ 本研究では、詩の特性を考慮し、改行の仕方や句読点についても「言語感覚」に含めることとした。

II 研究の内容と方法

仮説 詩の創作を中心とした指導を通して、表現を味わったり言葉を選択したりする学習活動を工夫すれば、児童の言語感覚を育成し、言葉で表現することの喜びを味わわせることができるであろう。

1 基礎研究

言語感覚の文献及び言語感覚を育てる詩の鑑賞・創作指導の先行研究を調べる。

2 調査研究

- ・日常生活の言葉遣いや詩の学習について児童の意識及び学習経験を調べる。
- ・言語感覚の指導についての教員の意識及び実践内容を調べる。

○時期：平成18年6、7月 ○対象：墨田区立押上小学校3～6年児童384名 同校教員20名

3 授業研究

言語感覚を育てる詩の創作指導と授業の検証を行う。

○時期：平成18年7月 ○対象：墨田区立押上小学校5年2組32名

4 教材・指導資料の開発（別紙「成果物集」に掲載）

「言語感覚を育て、表現する喜びを味わう詩の創作」のための児童用リーフレットを作成する。

「言語感覚を育て、表現する喜びを味わう詩の創作指導」の教員用リーフレットを作成する。

III 研究の結果と考察

1 基礎研究

言語感覚を「言葉の使い方について、その正誤、適否、美醜を鋭くとらえる感覚」ととらえていることは、各文献ともおおよそ共通していた。

言語感覚の育成のために、詩の鑑賞においては、言葉の適否・美醜、句読点の位置や有無、改行や行間の意味等を味わわせる指導が有効であり、詩の創作においては、言葉その他の表現の選択、意見や感想の交流、交流後の作品修正等の指導が有効であることが分かった。

2 調査研究

児童対象の調査では、自分の気持ちを十分に書き表すことができた時や自分が書いたものが褒められた時に詩を書いてよかったと思う児童が多い一方、発達段階が上がるにしたがって、詩の題材や書く方法について困難を感じる児童が多いことが分かった。

教員対象の調査では、音読・朗読の指導や教科書教材以外の詩を加えた鑑賞指導を行っている教員が多いことや創作における表現方法の指導について課題を感じている教員が多いことなどが分かった。

3 授業研究

(1) 単元名 「思いを言葉に」(特設単元 5時間)

教材 こやま峰子「たまご」、北原白秋「海雀」、三好達治「雪」【資料1参照】

(2) 単元の目標

国語への関心・意欲・態度	言語感覚を働かせて、優れた表現を味わったり、自分の思いを詩に書いたりしようとする。
書くこと	言語感覚を働かせて自分の思いを詩に書く。
読むこと	言語感覚を働かせながら、優れた表現を味わう。
語彙の増進・辨・擬	言葉その他の表現について、適否を理解・判断したり、美醜を感じ取ったりする。

(3) 単元の評価規準(「(6) 単元の評価規準と評価」に掲載)

(4) 研究主題に迫るための手だて

本研究において、詩の鑑賞と創作の視点として、児童に次の三つを示した。

〈三つの視点〉 児童に分かりやすく伝えるために、「三つのひみつ」として扱うことにした。

言葉のひみつ 言葉の意味、ニュアンス、繰り返し、文字の種類等の適否を理解・判断したり、美醜を感じ取ったりする。なお、正誤の判断については他の学習で扱うものとする。

行のひみつ 改行、行間(連と連との間)の意味を考える。

詩の表現における改行には、その言葉を際立たせる、言葉に着目させる等の働きがある。また、行間には、場面の転換、視点の移動、時間の経過等の意味がある。

句読点のひみつ 句読点の位置や有無の意味を考える。

句読点は、前の言葉に引き続いていく感じをもたせ、次の言葉に着目させる働きがある。句点は、収束感、終息感、区切りの印象をもたせる働きがある。句読点の位置や有無によって言葉や作品そのものの味わいが違ってくる。

① 言語感覚を育てる鑑賞の手だて

「三つのひみつ」に沿って鑑賞し、作者の思いと表現とのかかわりを考える。

② 言語感覚を育てる創作の手だて

ア 言葉集め…書く題材について言葉集めをして、イメージを広げたり、自分の思いを表すのにふさわしい言葉を見付けたりする。

イ 三つのひみつ…「三つのひみつ」にかかわる表現を取り入れて自分の思いを詩に書く。

ウ 交流…互いの詩を鑑賞し合い、意見や感想を交わして、題材や言葉に対するとらえ方、表現の仕方は様々であることを知り、作品の修正に生かす。【資料2、資料4-4参照】

③ 日常的に言語感覚を養う手だて

言語感覚は日々の活動や体験、様々な環境や条件によって養われる。日常的に言葉の意味や味わいを意識的にとらえたり考えたりする態度をもつことは、児童の言語感覚を養う上で効果があると考えた。そこで学習の終了時に、その学習で初めて知ったり気に入ったりした言葉、その言葉に対する自分の思いや考えを「言葉の日記」として記録することとした。

(5) 単元の指導 (5時間扱い)

第1時	教材「たまご」を読んで、詩には「三つのひみつ」や作者の思いがあることを知る。
第2時	教材「海雀」「雪」を読んで、「三つのひみつ」や作者の思いを考える。
第3時	題材を選び、自分の思いを明らかにして、「三つのひみつ」を意識しながら詩を書く。
第4時	互いに詩を読み合い、意見を交流して詩を修正する。
第5時	詩の朗読会を行う。

(6) 単元の評価規準と評価

領域	評価規準	学習シートの記述及び児童の作品・評価
国語への関心・意欲・態度	1 言葉等の表現や詩全体について、適否を理解・判断したり、美醜を感じ取ったりして優れた表現を味わおうとしている。【資料4-1参照】	例：第3時 創作 学習シートの記述より ○書くこと：雲 ○思い：雲はふしぎなものになる。 ○言葉集め：つかめない、のれない、見える、いろいろな形、白い、とどかない、たくさんある、上にある、すごい、何でできているか分からない、移動する、形が変わる、どれくらいの温度、フワフワ飛んでいるみたい 他 →評価：A（自分の思いに照らして言葉を多く集めている。作品にする際、言葉を取捨選択しており、思いを表現しようとする意欲が伝わる。）
	2 言葉等の表現を選択して自分の思いを表現しようとしている。	例：第3、4時 創作 学習シートの記述と児童の作品より 海 きぎ 浜魚 太き きき は らら 辺た 陽ら らら 大 きき にち ざら きき き らら 貝が らら 海 な らら 光光 が元 らら 光 宝 るる 夏ら 気ら 夏 せ 夏 夏 落ち あ 夏 き 海 海 の のち そん 夏 箱 海 海 てる だる 海 です。 いる。 空。 あ。 あ。 →評価：A（自分の思いを表すのに、言葉のリズムと繰り返しを効果的に使っている。また、最終行の言葉を工夫している。）
書くこと	1 言語感覚を働かせながら、自分の思いを表すのにふさわしい表現で書いている。【資料3参照】	海 きぎ 浜魚 太き きき は らら 辺た 陽ら らら 大 きき にち ざら きき き らら 貝が らら 海 な らら 光光 が元 らら 光 宝 るる 夏ら 気ら 夏 せ 夏 夏 落ち あ 夏 き 海 海 の のち そん 夏 箱 海 海 てる だる 海 です。 いる。 空。 あ。 あ。 →評価：A（自分の思いを表すのに、言葉のリズムと繰り返しを効果的に使っている。また、最終行の言葉を工夫している。）
	2 自分の思いを効果的に表現するために、言葉の選択や改行の仕方、句読点の打ち方等を考え直して、修正に生かしている。	例：第4時 交流後の児童の作品より つ白空ふ大空青空ど空 れいはらつは々はこは てフふせぶ悲ときま広 いワしるのししれでい るフぎ ないていも ワ み だ いる 続 した だ を いて 物 を いる 空 ← (修正後) 空は →評価：A（交流前は、空について「広い」と「ふしぎ」など二点を記述するのみであったが、交流後は「もう少し詳しく（空についての）文を加えるといいかもしれない。」というアドバイスを生かして、「空はきれいな」、「空は悲しい」という表現を付け加えた。また、「雨」や「雲」など直接的表現を避けている。）
読むこと	1 「三つのひみつ」に関する表現や、作者の思いと表現とのかわり等を考えて、優れた表現を味わっている。【資料4-2、資料4-3参照】	例：第2時 教材「海雀」の鑑賞 学習シートの記述より ○「銀の点点」について…海雀がたくさんいて、それが点点に見えた。 ○句読点について…「、」が、「。」だったら次の文から話が変わるという感じがするから「、」にしたのだと思う。 ○作者の思いについて…海雀が波に揺られていたり来たりしているのを銀の点点と見える様子を作者は伝えたかった。海雀が波と遊んでいるように作者は感じ、それを表した。 →評価：A（言葉や句読点に着目して表現の内容を理解するとともに、そこから作者の海雀を見つめる視線や思いを豊かに想像している。）
	2 自分の思いが伝わるような朗読の仕方を考え、工夫している。	
言語についての知識・理解・技能	言葉等の表現や詩全体の内容について適否を理解・判断したり、美醜を感じ取ったりしている。【資料4-5参照】	例：第1時 教材「たまご」の「いのちのつぼみ」という表現に対する言葉の日記の記述より ○言葉の適否を理解・判断している例 命は最初はつぼみだということを表している。→評価：B（詩の内容をとらえる上で大事な言葉に着目し詩の文言にしたがって理解している。） 命の元みたいなもの。→評価：A（「つぼみ」の内容について理解したことを別な表現でとらえ直している。） ○言葉の美醜を感じ取っている例 つぼみ（という言葉）がいい。→評価：B（詩の内容をとらえる上で大事な言葉に着目し、その言葉のよさを感じ取っている。） まだ小さいけれど、もう少しで生まれる。なんか楽しみだからいい。 →評価：A（「いのちのつぼみ」という言葉から生命の誕生を感じ取り、感じ取ったことを感想も交えて述べている。）

(7) 手だての検証

① 「三つのひみつ」について

「言葉」「行」「句読点」のそれぞれに着目している児童の割合（学習シートの記述より）

	言葉のひみつ	行のひみつ	句読点のひみつ
鑑賞（「海雀」、「雪」）の学習	83%	12.5%	33%
創作の学習	34%	47%	41%

創作シートの「工夫したひみつ」欄に、「言葉」についての工夫を記述した児童は全体の34%であるが、下記「② 言葉集めについて」と合わせて考えると、どの児童も自分の思いを表現するために言葉に着目して学習したと考える。

「行のひみつ」は、鑑賞の学習よりも創作の学習において意識している児童が多い。自分が選んだ言葉を大切にすることが、主に改行する意識につながったと考えられる。

「句読点のひみつ」については、自分の思いを効果的に表現するために句読点の有無や位置を考え、工夫した児童もいた。鑑賞の際、句読点についての学習をより丁寧に行えば、その意味を意識しながら創作する児童が増えると考えられる。

② 言葉集めについて

ほとんどの児童が、詩にこめる自分の思いに応じて、集めた言葉を取捨選択していた。自分の思いを詩に表すために、言葉を集める時点で上記「①」の「言葉のひみつ」を意識して学習していたと考える。

③ 交流について（交流カードの記述より）

友達の詩を読んで「よいと思った表現」の欄に書かれた意見のうち、52%が言葉に関するものだった。また、もっとよい詩にするためのアドバイスの欄に書かれた意見のうち、作品の修正に生かされたのは53%であった。

多くの児童が言葉に着目して、自分や友達の表現のよさを見付けたり、受けたアドバイスを基に自分の表現について考え直したりすることができた。

④ 言葉の日記について

作品を理解する上で大事な言葉を考えて感想や意見を記述したり、改めて言葉の意味をとらえ直して言葉のよさを感じ取ったりした児童が多かった。

①～④までの手だてで、児童は、言葉や、言葉と思いとのつながり等を考えて学習することができたと考える。行や句読点については鑑賞の活動を工夫することが必要と思われる。

4 仮説の検証

詩の表現方法の学習や、自分の思いを表現するのにふさわしい言葉等の表現を選択する学習を工夫することにより、児童の言語感覚が働くことが分かった。また、それらの学習を通して、楽しかった、詩の書き方が分かってよかったという感想を、多くの児童が述べていることから、児童は言葉で表現する喜びを味わうことができたと考える。【資料5参照】

IV 今後の課題

児童一人一人の言語感覚については、身に付けたことが日常の会話や読書などの言語生活に生かされるように、自己評価の在り方を工夫する。また、言語感覚の評価については、今後、年間を通して継続して行う方法を検討していく。

【資料 1】 本単元で使用した教材

○第一時で導入に使用した教材

たまご
 こやま峰子
 いのちの つぼみ
 ある日
 ちいさな くちばしで
 まどが ひらく
 うたが こぼれる

○第二時で鑑賞に使用した教材

海雀
 北原白秋
 (本文略)

雪
 三好達治
 (本文略)

【資料 2】 第三時で児童が選んだ題材と第四時の交流グループ

	第四時の交流グループ			
	文房具グループ (6人)	生活グループ (7人)	動物グループ (7人)	自然グループ (12人)
選ん だ 題 材	ふでばこ (2人) えんぴつ (2人) プラスチックケース 消しゴム	サインボール (2人) お金 (2人) 電話 ポケット 友達	愛犬 うさぎ 鳥 ハムスター カメ カブトムシ ダニ	雲 (3人) 空 青空 太陽 海 あじさい 鳥のさえずり さなぎ 石ころ 化石
交 流 の 様 子	行や句読点に関する意見のやりとりが多かった。	奇数人数のグループだった。必要に応じて指導者が詩の内容について意見を述べたり、交流の組作りを工夫するように助言した。	奇数人数のグループだったが、自主的に三人組を作り、交流していた。十分考えて交流カードを書いている児童が多かった。	本単元の前に、移動教室において自然にふれる体験をしているので、題材に選んだ児童が多くなったと思われる。交流相手の詩をじっくり読み、よく考えて交流カードを書いている児童が多かった。

交流する方法

- ① 相手を選び、互いに詩を読み合う。
- ② 「思い」が伝わったか、よいと思った表現、「思い」をよりよく伝えるためのアドバイスの三つについてカードに書き、相手に渡して内容を伝える。
- ③ 別の相手を選び、「①、②」の交流を繰り返す。

時間内 (約 20 分間) に、各児童が交流できた相手はおおよそ 3～5 人であった。

授業で使用した交流カード

交流カード
 五年組 () (さんへ)
 ○詩を読みました。あなたが詩にこめた思いは、
 () 十分に伝わってきました。
 () 表現のしかたを工夫すると、思いがもっとよく伝わり
 わると思います。
 ○いいな、工夫しているな、と思った表現は、
 (言葉、行、「」。「」について)
 ○あなたの思いをもっとよく伝えるためには、
 (言葉、行、「」。「」について)

【資料3】 第三、四時 創作 児童の創作シートの記述と作品及び「書くこと」の評価

<例1…「言葉のひみつ」を意識して創作した例>

<創作シートの記述>
 ○書くこと：お金
 ○思い：お金のよいところと悪いところ
 ○言葉集め
 ・人 ・悪い ・いけない ・あらそい ・遊び
 ・楽しい ・くやしい ・うれしい
 ○ひみつ
 ・うれしいとかそういう言葉を使わないで思いを伝える。
 ・「あくま」ということば。

お金
 人は、しあわせだ
 おかねがあればいきいきできる。
 だけどそれをさぎやにせさつにりようする人もいる
 お金は、すごい物だけど、
 人をあくまにかえる力も持っている。

<評価と考察>
 A： 「お金のよいところと悪いところ」を「生きていける」「さぎやにせさつ」というように具体的にイメージしている。思いを表すのに、直接的な表現を避けるという指導を生かし、「悪い」につながる言葉を集め、「あくま」を選択し、最終行にもってきている。

<例2…「言葉のひみつ」や「句読点のひみつ」を意識して創作した例>

<創作シートの記述>
 ○書くこと：うさぎ
 ○思い：私のうさぎはかわいい、という思い。
 ○言葉集め
 ・うさぎ ・フワフワ ・草が大好き ・人なつっこい
 ・カタカタ 自分のおりをかみ回す ・物を引く強い力
 ・ティッシュ、新聞大好き ・好ききらいが特がない
 ・ジャンプが得意 ・かみかみが好き ・甘い物が好き
 ・土を掘るのが好き ・どこでもトイレをする ・ひげが長い
 ・すみっこに入るのが大好き ・毛がすぐにぬける
 ・一日一回は体をなめる、けっこうきれい好き
 ・夜になると暴れまぐる ・あればあるほど食べまぐる
 ○ひみつ
 ・「それが、私のうさぎ」という言葉を、みんなに、私のうさぎだよというところを分かってもらえるように、二回入れました。
 ・さいごに「。」をつけませんでした。なぜかという「私の」という私のうさぎにはまだ、私が知らないことが多いので「。」をつけませんでした。

私のうさぎ
 モグモグ モグモグ
 あれば あるほど、食べまぐる
 それが、私のうさぎ
 カタカタ ゴリゴリ
 夜になると あばれだす
 それが、私のうさぎ
 フワフワ フワフワ
 さわると心がやすらぐ
 ふしぎだな

<評価と考察>
 A： うさぎについての言葉をたくさん集め、自分の思いを表現するのにふさわしい言葉を選択している。擬音やリズムを感じさせる言葉によって表現している。「それが」の次を読点で切ることで、「私のうさぎ」という言葉を際立たせている。それらの工夫が作者のうさぎに向ける「かわいい」という思いとつながっている。

<例3…「言葉のひみつ」や「行のひみつ」を意識して創作した例>

<創作シートの記述>
 ○書くこと：鳥のさえずり
 ○思い：山の中で聞こえているいろいろな鳥たちの鳴き声に、気持ちが落ち着く思いがする。
 ○言葉集め
 ・合唱 ・うたっている ・自然の中 ・かなでる
 ・おしゃべり ・仲間たち ・風 ・緑
 ○ひみつ
 ・「しずかに」をひらがなにした。
 ・一、二、五、六、七行目は自然のことで、三、四行目は人間のことを書きました。三、四行目の前と後ろの行を空けました。また工夫として二文字ずつ下げました。

鳥のさえずり
 風がそよそよ
 葉っぱをゆらす。
 しずかにゆれる
 ハンモック。
 遠くできこえる、
 とりのさえずり
 山の中にひびいてる。

<評価と考察> A： 行のひみつの指導を基に、人と自然とを、連を分けて区別している。第一時教材の学習を基に「しずかに」という言葉をはじめ、平仮名で表記している言葉が多い。「そよそよ」「ゆらす」「ゆれる」等の言葉で、「気持ちが落ち着く」という思いを伝えている。「五七」のリズムを中心に行っている。

【資料4】 児童の学習シートへの記述

【資料4-1】 第一時「言葉の日記」より 詩「たまご」の各文言に対する感想 評価規準「国語への関心・意欲・態度」

児童	たまご	いのちの	つぼみ	ある日	ちいさな くちばしで	まどがひらく	うたがこぼれる	評価
1			気に入った。花のつぼみではなく「命＝命が誕生する一歩前。」			家にあるまどが開くという意味だが、文を読んでみると、鳥がからの中から出るところだと思いが気に入った。	最初は意味が分からなかったが、ひなの鳴き声かなと思いが気に入った。	A
2		命のもとみたいな物。				人生の第一歩。	誕生のしゅんかん、喜びを告げる。	A
3		命を植物の花にたとえているな。				せまいところから広いところへ行くと感じ。	この歌はひなの初めての鳴き声のことかな。	A
4	なぜ題名がたまごか。				幼いころの鳥みたい。	からが開いたみたいで好きになった。		B
5		命が宿っているということが分かる。				からをわってでてくる様子が思いうかぶ。		B

【資料4-2】 第二時 鑑賞シートより 詩「海雀」の「三つのひみつ」と作者の思い 評価規準「読むこと 1」

児童	言葉について		行について	句読点について	作者の思い	評価
	海雀	銀の点点				
1	きつと海雀がたくさんいてそれが点点に見えた。	波ゆりくれば…かけ失する、	「海雀」という所で必ず改行している。	「、」は、そこがもし「。」だったら次の文から話が変わるっていう感じがするから「、」にしたのだと思う。	海雀が波にゆられていったり来たりしているのを銀の点点と見える様子を作者は伝えたかった。海雀が波と遊んでいるように作者は感じ、それを表した。	A
2	旅をする鳥	大波がくれば音をたてる。そこに海雀がいて、大波が去っていきかげが見えなくなる。まとめて、波がくれば見えるが、波が引けば旅に出る。			海雀は旅をすることを伝えたかった。	B
3	海雀は寒い場所にいるからだと思う。	波というのは雪の流れだと思う。それで、波引きゆけば海雀はここからいなくなる。要するに海雀は渡り鳥。		句読点がないと区切れがなくて、気持ちがこもってないように思えた。	海雀を見てすばらしいと思ったことをそのまま書いてこの詩ができたんだと思う。	B
4	雪だと思う。	作者の気持ちがいっぱい入っているんだと思う。		句読点があると気持ちがこもっているように感じる。	寒い冬でも海雀のようにたくましく人々も生きていき、やがてはかげが失する海雀と同じだよ、ということを書いたかったのだと思う。	B
5				最後の言葉以外全部に読点がある。最後だけ句点がある。	大きな波が来て、海雀は飛んでいったことを表したかったのかもかもしれない。	B

【資料4-3】 第二時 鑑賞シートより 詩「雪」の「三つのひみつ」と作者の思い 評価規準「読むこと 1」

児童	言葉について			行について	句読点について	作者の思いについて	評価
	太郎・次郎	眠らせ	屋根				
1	兄弟。	夜が眠らせている。	雪ふりつむ			冬の夜、二人の子を眠らせた人の思いやり。	A
2	兄弟。知り合い。実は大人。	眠らせたのは親、相手（兄弟同士の）。	2人は兄弟で同じ家の屋根の様子。	普通の文みたいに書いている。	読点を取ると読みにくい。句点が付いているからきっちり終わる。	作者の実際に体験したこと。太郎か次郎が作者で、親が子ども（作者）を眠らせて、寒い夜だから作者の家に雪がふりつもっている（兄弟の次郎は太郎といっしょ）。	A
3	兄弟か、知り合い。	眠らせたのは雪。			句読点は詩の中の時間を空けている。	雪国の夜はさみしくてかなしい。	A
4	太郎は次郎の兄。	眠らせたのは母。	雪は神様がふらした。			作者は、自分がこの太郎や次郎だと思って書いたと思う。	B
5	兄弟。		自分の家（の屋根）			作者は五さいごろ、この詩の通りに眠らせてもらったのでそれを書いたのだと思う。	B

【資料4-4】第四時 交流シートより ○…よいと思ったところ △…アドバイス

詩「海」への意見・感想 ○「海は宝石箱です。」が海はとてもきれいだということが伝わった。 △「魚たちが元気に遊んでる」の前を一行あげた方が気持ち伝わる。	<交流後の修正> アドバイスを生かして、「魚たちが元気に遊んでる」の前を一行空けた。
詩「空は」への意見・感想 ○「(空は) 白いフワフワしたもの (をつれてい)」がよい表現。 △「つれてい」だと空まで動いているように感じているので、「かっ て (飼って) いる」にしてもいい。	<交流後の修正> アドバイスを生かして「つれてい」を「かっている」に直したが、最終的には、再び「つれてい」にもどした。
詩「お金」への意見・感想 ○「(人をあくまにかえる)」について) お金で人がどうなるか、という言葉工夫している。 △「(お金を) わるいことに使う人もいる」の悪いことをくわしく書く。	<交流後の修正> アドバイスを生かして、「さぎやにせさつにりようする人もいる」という表現に直した。
詩「私のうさぎ」への意見・感想 ○「モグモグ」とか「カタカタ」とか、音で表現しているところがよ かった。句点をわざと書いていないことが分かった。 △読点をつけた方がよい。	<交流後の修正> アドバイスを生かして、「それが私のうさぎ」の「それが」の次に読点を打ち、私のうさぎなんだ、という意味合いを強めた。

【資料4-5】第五時 言葉の日記より 朗読会で聞いた詩に対する感想(「 」内は朗読を聞いて心に残った言葉)

評価規準「言葉についての知識・理解・技能 1」

児童「(題名)」	児童1の「ダニ」について	児童2「サインボール」へについて	児童3の「太陽」について	児童4の「お金」について	児童5の「えんぴつ」について	評価
児童1の記述		「野球に興味がない人でもサインボールをもらおうと自まんする」そう自まんすると野球に興味をもっている気がする。	「ぼかぼかあったかい」心もあたたかくなる。	「あくまにする」お金ってこわい。		A
児童2の記述			「ぼかぼかあったか」本当に心があった。たたまった。	「あくまに変える」お金は人をあくまに変えるのは本当だと思った。	「あああ、おれちゃった」自分の思いも詩に入れると分かりやすくなる。	B
児童3の記述		「野球に興味がない人でも自まんする」本当に自まんしそう。		「お金は人をあくまに変える」本当みたいな感じがした。	「ボキッ」「あああ、おれちゃった」さみしい。	B
児童4の記述	「カエルの卵がダニだった。」新しい発見。	「野球に興味がない人でもサインボールをもらおうと自まんする」ぼくもほしいと思った。	「ぼかぼかあったかい」ひなたぼっこができそう。		「ボキッ」さみしい感じ。	B
児童5の記述			「太陽がぼかぼかあったかい」が本当に暖かいと思う。	「あくまになる」まほ		B

【資料5】本単元学習後の感想(「一言感想」自由記述)のまとめ

○鑑賞の学習について ・作者の思いを感じたり考えたりすることがおもしろかった。 ・詩には作者のいろいろな思いがたまっているんだな。 ・詩にはいろいろなことがかくされているんだな。 ・「三つのひみつ」から作者の思いを考えることが難しかった。	(「創作について」の続き) ・詩に合う(思いを伝えるのにふさわしい)言葉を見つけることが大変だった。(2人) ・思いを言葉にすることが難しかった。 ・短い文章で人に自分の思いを伝えるのは難しかった。
○創作について ・詩の書き方を勉強したこと、または、教えてもらったことがよかった。(3人) ・詩の書き方が分かったことがよかった。(2人) ・自分の思いを詩に書けたことがよかった。(2人) ・考えて書くことが楽しかった。 ・うまく詩を完成できたことがよかった。 ・初めて自分の思いを詩に書けた。 ・自分の思いをそのまま言葉に出すのはよいと思った。	○交流について ・いろいろな詩(友達の詩)を読めたことがよかった。(2人) ・みんな(友達)の詩にこめた気持ちが伝わってきた。 ・(友達の詩を読んで)こんなこと(題材)も詩にできるのかと思った。 ○その他 ・これからも自分で詩を作りたい。(2人) ・これからも詩の勉強をしたいぐらい(楽しい学習)だと思った。